リンク元

美術部　御射鹿池（みしゃがいけ）を訪ねて

鹿島　賢治

日本画家の東山魁夷を BS 放送で特集したのを見ていた。

雅号は、東山が京都の山を連想する優しい感じに対して、魁は大いなるで、夷は安らかなりという、これからの芸術の道の険しさを自覚するという意味でつけたと言われている。

　特集は、代表作のほか、ヨーロッパや京都の古都を描いた風景画などが解説されていた。

その中で、「緑響く」（作品は梅雨の頃）の晩秋の景色がすばらしく 2 年前、現地を訪ねることにした。

御射鹿池は、奥蓼科温泉郷に通じる「湯みち街道」にある農業用ため池である。

諏訪大社の鹿狩り場として「神野」と呼ばれた神聖な地で、神に捧げる鹿を射る神事「御射山御狩神事」が名称由来といわれている。

池をとりまくカラマツ林は、四季折々色を変え、春は新緑、秋は黄金色、冬は雪と氷に閉ざされ、それぞれの季節の風景を水面が、映し出すことも魅力です。

9 月末、10 月は 2 回、11 月は 10 日頃の計 4 回奥蓼科を訪ねたが、9 月と 10 月の 3 回は時期尚早、11 月は乗車したタクシー運転手に「お客さん、もう通り過ぎました。」自然のドンピシャは実に難しい！

（当たり前だけど）

　訪ねて驚いたのは、農水省「ため池百選」に選定されたこともあり、池の幻想的な美しさから、新緑の季節には観光客で賑わい、御射鹿池が観光地化していたことだ。

　池は、酸性が強く、生き物が棲息することができない、酸性を好むチャツボミゴケが湖底に繁茂していることで、青緑に光る湖面に樹木が映る。

【生誕１１０年 東山魁夷展　ポスター】

　作品「緑響く」は、18 枚の連作の最初の 1 枚。「白い馬の見える風景」で「郷愁のメロディーが聞こえる」と絶賛された。描かれた木々は、緑一色で、画質は油彩画のように凹凸で、絵の中に静かに横切る白馬に、祈りが込められているといいます。

たった一つの絵画でも実在する八ヶ岳の水をたたえる「御射鹿池」の凛とした空気感が、人々に大きな影響を与えるものだ。

東山魁夷の作品は、自然そのものの写生にもとづいていること、特定の時と所を離れて一つの象徴となっていること、表現の底には、日本画の伝統が流れていることの三点が、風景画に収められている。

今秋は黄金色や真っ赤に染まった紅葉の御射鹿池と長野県信濃美術館の東山魁夷館も覗いてみようと思う。